



新たな航空燃料を活用した 「カーボンニュートラルな成長」への取り組み

ANAホールディングス(株)

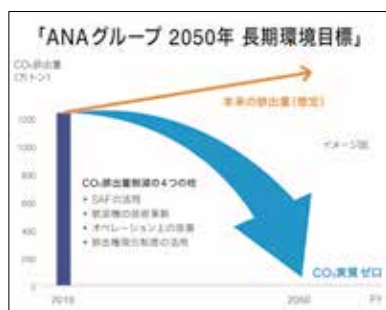
環境意識の高まりや規制の強化を受けて、脱炭素への取り組みは、航空業界においても加速している。2021年以降、国際航空においてCO₂排出量を増加させない「カーボンニュートラルな成長(CNG2020)」が国際公約となったことで、航空各社のCO₂削減に対する意識が高まっている。航空分野でのCO₂削減の切り札ともいえる「SAF」を活用した、ANAグループのCO₂排出量削減に向けた取り組みを紹介する。

SAFの活用により環境負荷を低減

ANAグループは、「安心と信頼を基礎に、世界をつなぐ心の翼で 夢にあふれる未来に貢献する」を企業理念に、航空事業を中心としたエアライングループとして、国内外の航空ネットワークや顧客基盤を活かしながら様々な事業を展開している。環境に対しては、2021年4月、中長期環境目標を刷新し、環境負荷軽減への取り組みを加速させている。新たな長期環境目標である「2050年度までに航空機の運航におけるCO₂排出量実質ゼロ」の実現の柱となるのが、「原材料の生産、収集から燃焼までの過程で、CO₂の排出量が少ない持続可能な供給源から製造されるジェット燃料」であるSAF(Sustainable Aviation Fuel)の活用である。

2019年10月、ANAは製鉄所や製油所などの排ガスからエタノールを製造するガス発酵技術により製造されたSAFを使用し、米国からのデリバリーフライトを三井物産と共同で実施した。この時ANAは、SAFを購入・使用するだけでなく、製造所からの輸送、通常燃料との混合過程や品質検査も主体となって実施するなど、飛行機への給油までの一連のサプライチェーンを

構築し、そのノウハウを世界に先駆けて習得し、SAFでの航空機運航を実現させた。



食品廃棄物などを原料とするジェット燃料を 国内で初めて定期便に活用

2020年10月、ANAはフィンランドに本社を置く世界有数のSAF



製造会社であるNESTE社から、廃食油・動植物油脂などを原料とする、商業規模のSAFを調達した。この時調達したのは、東京～ロンドン間をボーイング777-300ER型機で運航した場合、片道約60便に相当する燃料であり、日本までの輸送を含めても、既存のジェット燃料と比較して、約90%のCO₂排出量の削減効果が証明されている。2020年10月以降成田、羽田発の定期便で使用しており、日本発の定期便でのSAFの使用は、日本の航空会社として初めてのことである。

航空業界では、CO₂排出量の効果的な削減手法の一つであるSAFを使用した運航に向け、その安定的製造・供給が強く求められており、特に国産SAFの産業育成、量産対策の構築が喫緊の課題となっている。ANAホールディングスは、次世代技術として期待されるCO₂を原材料としてSAFを製造するカーボンリサイクルのビジネスモデルの検討にも取り組んでいる。

ANAグループはこれからも環境リーディングエアラインとして、環境問題に取り組み「夢にあふれる未来へ貢献」していくことだろう。

(国内広報部主任研究員 塩入真理)